2026 AUTOBACS SUPER GT Round5
SUZUKA GT 300km RACE

apr LC500h GT

äpr
Racing Constructor

2026 AUTOBACS SUPER GT Round5　SUZUKA GT 300km RACE

開催地：鈴鹿サーキット（三重県）／5.807km

8月22日（予選）
天候：晴れ　コースコンディション：ドライ　観客数：20,500人

8月23日（決勝）
天候：晴れ／曇り　コースコンディション：ドライ　観客数：32,000人

apr Racing Constructor

鈴鹿の混戦を11位で乗り切る

31号車 apr LC500h GTは、第1戦岡山と第2戦富士で3位表彰台を獲得。第3戦マレーシア大会の延期により、今季3戦目として開催された第4戦富士でも14位に入り、ドライバーズランキングは6位とタイトル争いの渦中にいる。
　第5戦の地、鈴鹿はハイダウンフォースマシンが得意とするサーキットだ。FIA-GT3車両の台頭により、31号車を含むGTA-GT300車両のアドバンテージはなくなってしまったが、それでもLC500hが上位を狙うべきコースであることに変わらない。

　サクセスウェイト68kgの31号車は、前戦からさらにサクセス給油リストリクターが絞られ、給油時間はプラス10秒かかることになる。条件は厳しくとも、4戦連続のポイント獲得を目指す一戦となる。

公式練習／18位　8月22日（土）9:45～11:30

　公式練習は気温31度、路面温度37度というコンディションでスタート。まずは小高がドライブし、持ち込みセットのチェックを進めた。

　今回の31号車は、新開発のブリヂストンタイヤを持ち込み、セットアップでも新たなトライをしていた。これらの確認、合わせ込みにおいて公式練習は貴重な時間であったが、結果として10時00分から10時17分、10時22分から10時45分まで赤旗中断があり、思うようにメニューを進めることができなかった。

　それでも、小高はセッティングのアジャストを進めるにつれ確実にタイムを伸ばしていく。計測7周目には2分00秒118を記録し、この時点で13番手のリザルトを刻んだ。

　2回目の赤旗中断からの再開は小山が担当し、4周の確認ラップをしてピットに戻り再び小高が走行。14周目には1分59秒892にタイムを更新した。

　その後、17周目からは小山がステアリングを握る。ちょうどGT300の専有時間に入るタイミングでもあったことで、予選では使わない仕様のタイヤだがニュータイヤを履いて予選シミュレーションを行った。タイムは1分59秒490。Q2進出のボーダーラインとなる18番手で公式練習を終えた。

公式予選　8月22日（土）
Q1 B／13位　15:48～15:58
総合／26位

予選Q1はB組に出走。A組スタート時のコンディションは気温34度、路面温度46度だった。チームは今回、小高をQ2に温存する戦略を採る。鈴鹿はオーバーテイクが難しいコースであり、予選で上位グリッドを得ることが最優先事項だからだ。

Q1を担当した小山は、アウト、ウォーム、プッシュの予定でいたが、そのウォームラップで前後のクリアが取れず、もう1周ウォームを入れて計測3周目にアタック。タイムは1分58秒987で、タイミングモニター上では8番手に位置していた。

小山は翌周もアタックを続ける。セクター1・2では自己ベストを刻んだが、そこでタイヤのピークグリップが落ちてしまい、タイム更新はならなかった。結局3周目のタイムが31号車のベストとなり、その後タイムを更新したライバルに抜かれ14台中の13位。Q2には進めず、決勝は26番グリッドからのスタートとなった。

小高一斗選手

「今回は方向性を変えたセッティングで持ち込んで、公式練習の走り出しでは悪くないけど、タイヤもこれまでに履いたことがない仕様だったので、ちょっと微妙な感じでした。そこから車高とかをアジャストしたりしましたが、以前のセッティングに戻す方向を判断しました。タイヤはロングランをテストできていないので、決勝でどうなるかは分かりませんが、温度レンジは合っていました。予選はできればQ2を走りたかったけど、しかたないです。タイトルを獲得するために、決勝ではうまく戦略でポイントを獲るか、ポイントが獲れなくても次につながるレースにしたいです」

小山美姫選手

「公式練習で乗ったときは、いままでとはまったく違うフィーリングでした。全体的に限界値が低くて、アンダーステアも強く感じました。予選は、公式練習の専有走行で履いたのとは違う仕様のタイヤで、クルマのセッティングも今までの方向に戻り、路面も張り替えられていたり、サクセスウェイトも積んでいたので昨年とはいろいろと違いました。アタックは当初の予定から1周ウォームラップを多くしましたが、アタックラップ自体はミスなくまとめることができました。2アタック目は、やはりタイヤのピークが過ぎていましたね。自分としてはもうちょっとタイムを詰められたとしても、ミスも無く走れたので、劇的にポジションを上げることはできなかったと思います」

金曽裕人監督

「今回の持ち込みセットは『来年を見据えた』チャレンジ的なものでしたが、残念ながらアジャストするには走行時間が赤旗などで無くなり、予選に向けてはこれまでの状態に戻しました。タイヤも新しい仕様ですが、ブリヂストンタイヤに不安はありません。予選については、Q2で小高選手に上位グリッドを狙ってもらうためにも、Q1を小山選手に託しました。通ってくれると期待していたのですが……さすがに26番手からのスタートはシーズンを見据えると厳しい結果。どこで、何が原因でタイムを失ったのか、小山選手にはこの経験を糧に、自分自身を乗り越えていってほしいですね」

決勝レース（48周）／11位　8月23日（日）13:37～15:24

決勝前、12時00分から20分間設定されたウォームアップ走行では、第2スティントで使用するタイヤをスクラブ（皮むき）しつつ、小高を中心に、予選前に変更したセットを再検証。結果的にバランスは良くパフォーマンスが高いことが確認され決勝セットは不要の判断となった。

スタートドライバーは小山。気温34度、路面温度49度という暑さの中、スタートが切られた。1コーナーで前が詰まり、アウト側から1台のオーバーテイクを許してしまうが、前方でコースオフなどの混乱があり、オープニングラップはひとつ順位を上げて25番手でコントロールラインを通過した。

その後も今回のレースは荒れた展開となった。前方ではコースオフ、緊急ピットが続き、15周目にFCY(フルコースイエロー)が導入されたときには他車の離脱から労せず21番手に浮上。そしてFCYが明けた17周目、ルーティンピットに向かう。

チームはここでタイヤをフロント2輪のみ交換する戦略を採る。給油も済ませ、メカニックたちはミスなく小高をコースに送り出した。2輪交換でタイムを稼ぎ、小高は20番手でコースに復帰。26周目、明らかにペースが速い11号車 GAINER TANAX Zに先行を許すが、堅実な走りで追い上げていく。

レースは最後まで荒れた展開となった。前走車がトラブルやアクシデントで戦線を離脱する中、31号車は入賞圏内に浮上する。終盤はさらに展開が動き、42周目にGT300車両によるクラッシュが発生してセーフティカー(SC)が導入されると、11番手までポジションを上げていた。車両の回収とコースの修復に時間を要したことで、レースはSC先導のまま終了した。

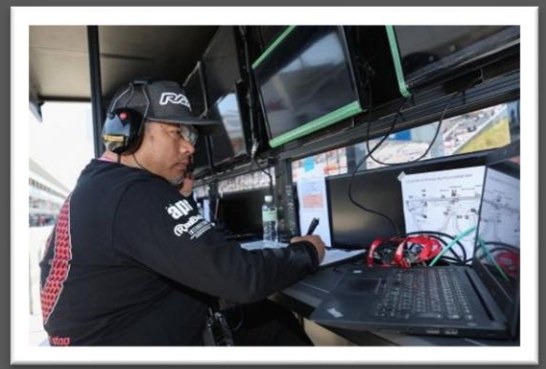
サバイバルレースとなった過酷な戦いを、26番手スタートから11位でフィニッシュ。運にも助けられたが、それも実力のうちだ。4戦連続の入賞で貴重な5ポイントを積み上げ、ドライバーズランキングはトップから10ポイント差の7位につけた。第3戦マレーシア大会の代替戦として最終戦もてぎが連戦開催となり、残すは4戦。タイトルは射程圏内。虎視眈々と、逆転チャンピオンへの道を突き進む。

小高一斗選手

「決勝、僕の第2スティントは淡々と走っていた感じでしたね。11号車とはペースが違いすぎて、そこで争っても自分のペースを落とすだけなので、無理せず行かせました。バトルというバトルはなかったのですが、車のバランスはフロントタイヤが落ち着いてからは非常に良くて終盤には10番手の32号車（ENEOS X PRIME AMG GT3）の1秒圏内に入りましたが、相手は加速力があり、抜くことはできなかったです。今回の11位は運に助けられたし、スタート位置からすると素晴らしい結果だと思います。でもやっぱり、もっと前からスタートしないとシリーズは厳しいですね」

小山美姫選手

「オープニングラップの1コーナーは、イン側から抜けるかなと思ったのですが前に詰まってしまって、結果的に位置取りが悪かったと思います。その後のペースは周囲の中では良くて、チャンスがあれば抜こうと思っていましたが、今回自分に与えられた仕事は2輪交換に向けたタイヤ温存と、給油時間を短縮するための燃費走行だったので、そこに集中しました。そのタスクはこなせたと思います。11位でポイントを獲得できたのは良かったですが、ドライバーとしてもっと磨けるところがあると思うし、クルマのセットアップももっと詰めていかないといけないですね。次のSUGOは昨年、表彰台を狙えるポジションを走れていたので、上位を目指したいです」



金曽裕人監督

「今回の11位はラッキーでした。レースを終えてタイヤを確認したら、左フロントに穴が開いていました。SCが導入されたタイミングでデブリを踏んでしまったようで、レースが再開していたらポイントは獲れなかったと思います。チームとしては小山選手にもタスクを与え、フロントタイヤ2輪交換でサクセス給油リストリクターによるロスを補い、ピット作業もミスなくできて戦略としては全てうまくいきました。小高選手は前後のタイヤバランスが違うアウトラップでもタイムを大きくロスすることなく、本当にすごいドライバーだと再認識です。予選順位26番手から15台抜きの11位の結果に対し、今回はチーム全員が大きくリカバリーしてくれ、ファンの皆様、関係する皆様に感謝です」